イ 5
1612
1

勢州 山田 川北屋

早稲田大学図書

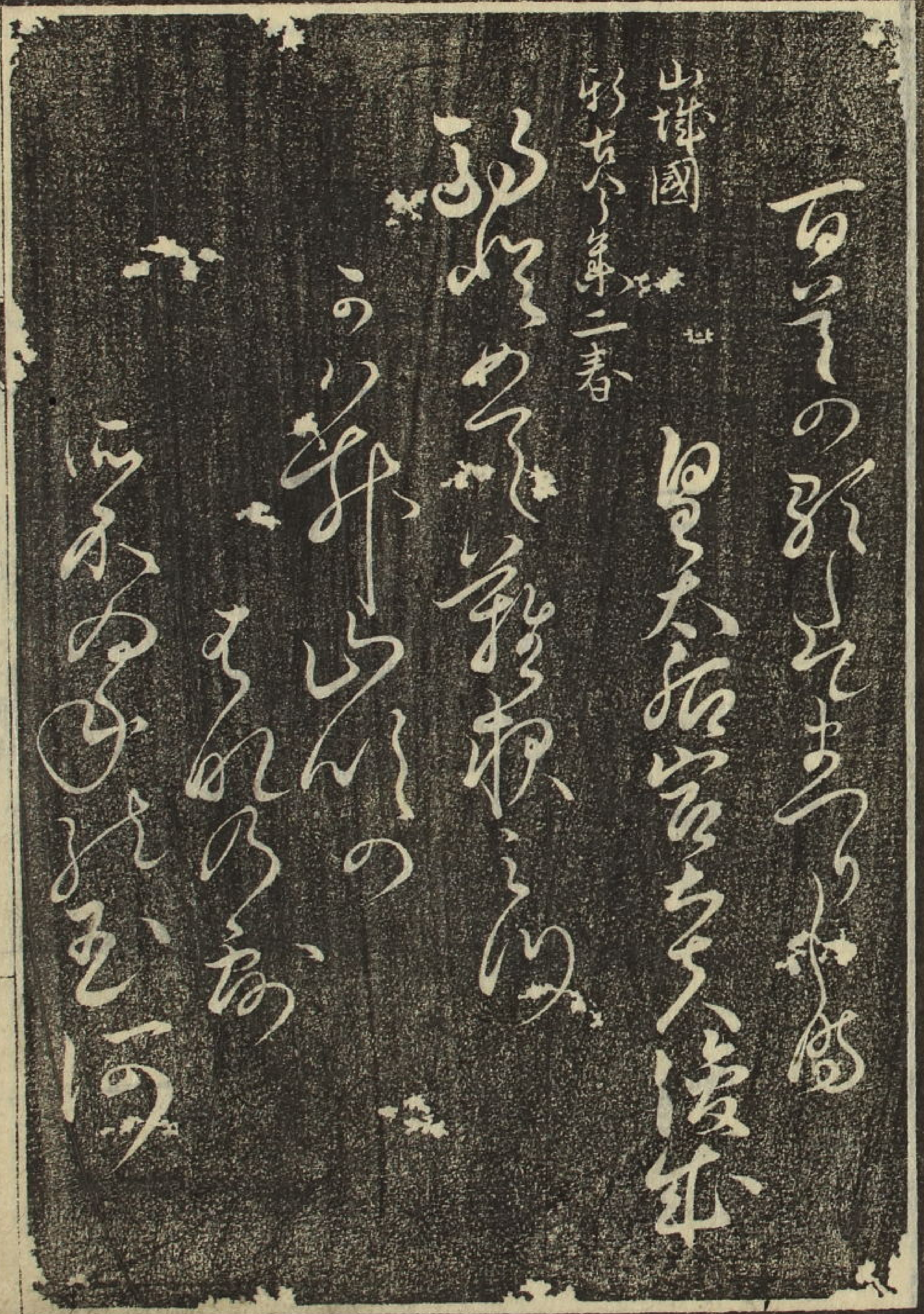
志田吉之章

門 46 號 1612 巻 1

理齋随筆巻之四目次

壹一しら拍子の起り
貳一神楽田楽歌舞妓
三一白拍子の舞ぶり
四一今様の唄
五一しら拍子の奇侠
六一頼政の旧跡
七一判官眉
八一龍田明神の侘宣
九一十字を賜ふ
十一楠正通関東下向
十一一七種
十二一竹に赤く摸様を付る
十三一朝鮮の地名
十四一朱晦庵の足病
十五一羅城門の旧跡
十六一銀閣寺
十七一色情溺れ易し
十八一八幡太郎義家

尾陽知多 萬國書物所 梧鳳軒蔵



十九 一 あふひの的

廿 一 陣太鼓

廿一 一 彌子暇の寵

廿二 一 加賀の千代女

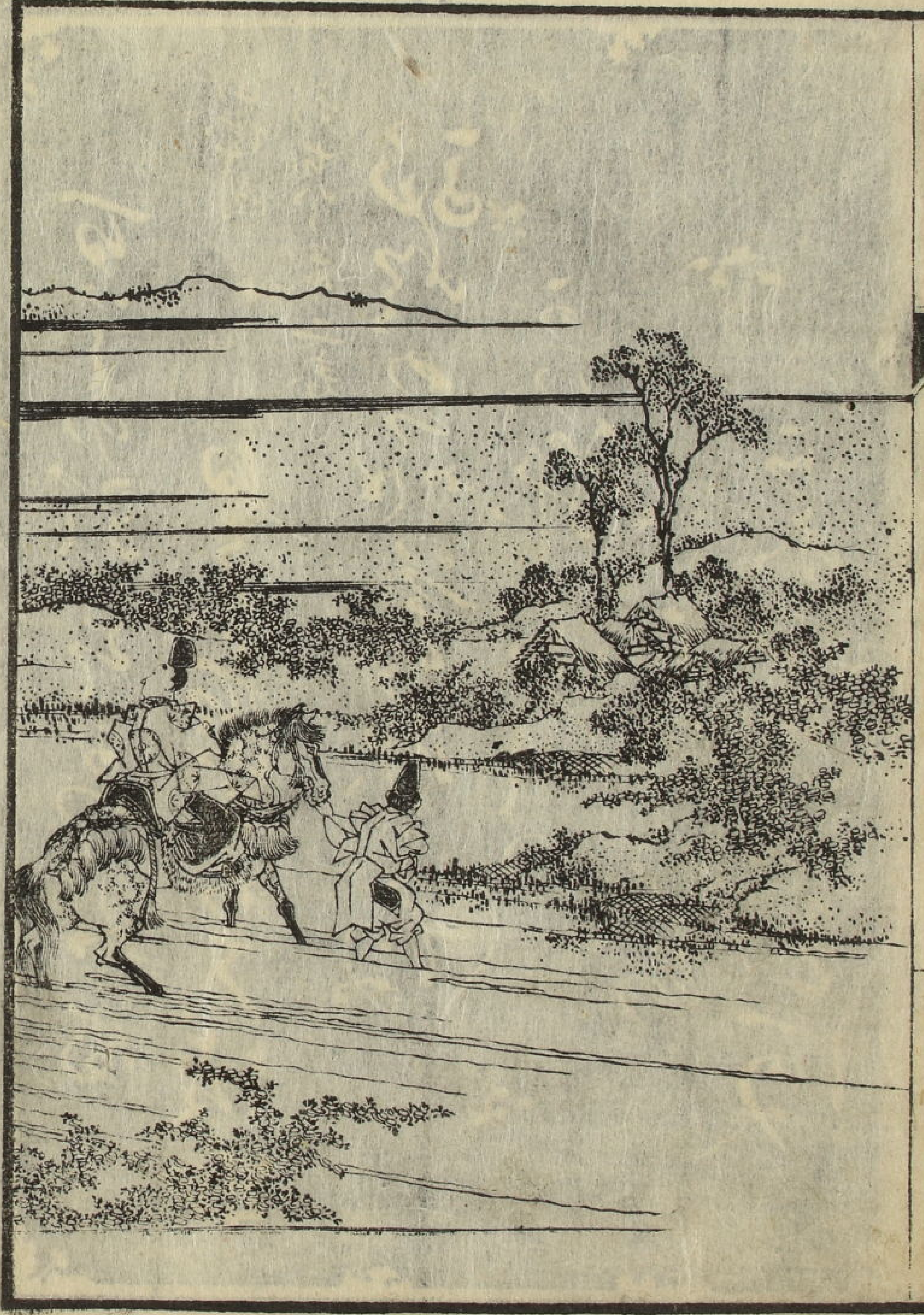
廿三 一 妊婦の男女を知る

廿四 一 草臥ぬ薬

廿五 一 眼鏡杖の論

廿六 一 西山宗因の句

廿七 一 高名の人の仕業は後代に残る



井出

○山吹のはなしやかましくいふまゝに様子も井出の玉川　蜀山人

○野幇間の蝶もしくも山吹の花の口添ある井手の玉川　紀定丸

○蜂ともなく花の蜜しれん山吹の露の手代ある井出の玉川　理齋

「花の口添」ハあらぐき郷の山吹の色ハ人の鼻哥にもかゝらん
このうれバ俊成卿も其の露をゆ小判ハ駒にもうらんとこの手の業にして
あるべし那此山吹富貴の色なる物俗人ハいふも更り風雅を好める
人もこれをもてはやせるなるハ井手の山ぶきさくも色ハにほふさかな
我山吹が心ハ木蕊ともおりかべくや又ハ人の身にうきまじ
色をそむべれぬ州の身すくハさりに用なる物すしあれべきし
まだ色に咲出る象身さへ人の山吹色でなし下戯
いかなる又[illegible]をいふうへくなくもをなのかくし腹立くつ宗
治の園ある但し名の貴茶と友に世の世に[illegible]川からも尋らじ
かれが如くをこうけれしあまりてさへど賛へ此色に媚出る
蔦なるれバ甘せんもくべし此山吹倭成卿の歌ハ思ふべかれ
ど遠慮に思ひん事

○玉川よあらし馬のいりてそ鼻の露に山吹の花　手柄岡持

理齋随筆巻之四

志賀忍輯

一 續古事談に妙音院相國曰舞と見哥を聞て国の治乱を知る権家常の習なりけると世間に白拍子と言舞其曲と聞くに五音の中には商の音之この音は亡國の音と舞の姿を見れば立廻り空を向ふぞく立てり其姿物とおもふ姿なり体曲身體ともに不快の舞なりとぞのたまひけるとなん 理齋この事を考ふるに実に至極の論と名にたかき嶋の千載若の前祇の前司静女佛御前萠妓王妓女なとの世の中をみだりなる乱世にて是を憂せし人々其身を亡ぼしさざりけるも異域の女楽も又同じ趣にて亡國の音といい

へるハむべるか今の世のしらハ白拍子ハ无けれども藝者をどり子抔いへるも淫奔なるものゝみなく家を失ひ身を亡ぼすものあらざるハなし

（二）右白拍子のこと近年或侯の書されしに是を取立ることあり白拍子ハ下学集に歌舞而衒賣女色者也とみへたれバまことにをどり子藝者と同じき者也徒然草に通憲入道舞の手の中に興ある事を撰び磯の禪司に教へて舞しむとあるたゞ是その始にて後代になれるまゝに世色に変化せしもこゝろなりハ神楽が田楽となりまた歌舞伎と成し如く誹諧なども蕉風が一変して江戸座と成紀逸が六玉

川体の句となりまた一変して川柳となり謡も浄瑠璃となり豊後節が新内となり說経が祭文となり又本歌が狂歌となるかくのごとき類あまたあり明和八九年の頃より更に潮来節といへるもの江戸に流行せしが今ハ五色にいたりて二上りといふことハやりたれどいつしか川柳また此頃ハ祭文に三絃を合せ何やらまるでかを仕組にあるされバ昔の白拍子抔といへるもののやうなりしも今京都にて舞子といへるもの是ぞ白拍子の遺風ともいふべし

（三）白拍子ハ元来白き水干にサフマキ（左右巻）とさせ烏帽子を引入させまつバ男舞と云禪師が女静これを継ぐことよりなるりと

また或説には右白き太刀と用しは中比水干ばかりにて
太刀と名付しを是の如く白き水干を着るよし白拍
子とはいふとなり。源平盛衰記十七に曰、白拍子は漢家にては虞氏
楊貴妃王昭君、我朝にては鳥羽の院の御
宇島の千歳若の舞とて二人の遊女舞そめしといへり
今の世に拍舞妓といふものの是なり

㊃相國清盛の妾妓王妓女は白拍子の子なり。其後加賀國より佛
御前といへる白拍子出たり。相国の御前にて今様を舞ひ其
唄に

君をはじめて見る時は千代も経ぬべし姫小松の

まへの池なる亀岡に鶴こそむれ居てあそぶめれ
と押かへし〳〵三遍歌ましたりければ見聞の人々皆
耳目を驚かしけるとぞ。また曽我物語に、ふじのかり場工藤が館にての酒盛十郎盃
はいかにものかぬござんなれと何とてましかの世は香待女
まふとおぼしくなり今様を唄ふべしと云ければ二人の君きせ川かめづるまずの曲を
扇拍子打ちながら

ほうらい山には千とせふる千秋万歳かさなれり　松の
枝には鶴すくひ巌の上には亀あそぶ

といふ一せいをかへし〳〵二遍までこそ唄ひなまいかと云て
十郎殿は乱拍子の上手ときけども今まで見ず　一番舞

なんと云ふ術成る細に及びしく持たる扇をさらりと開く
君が住む亀の尾なる山瀧川せんと云一せいをあげてうたひし
舞に延年彼處にて立ちて数曲の内にある章之
とく此頃露木子が書付見せられ

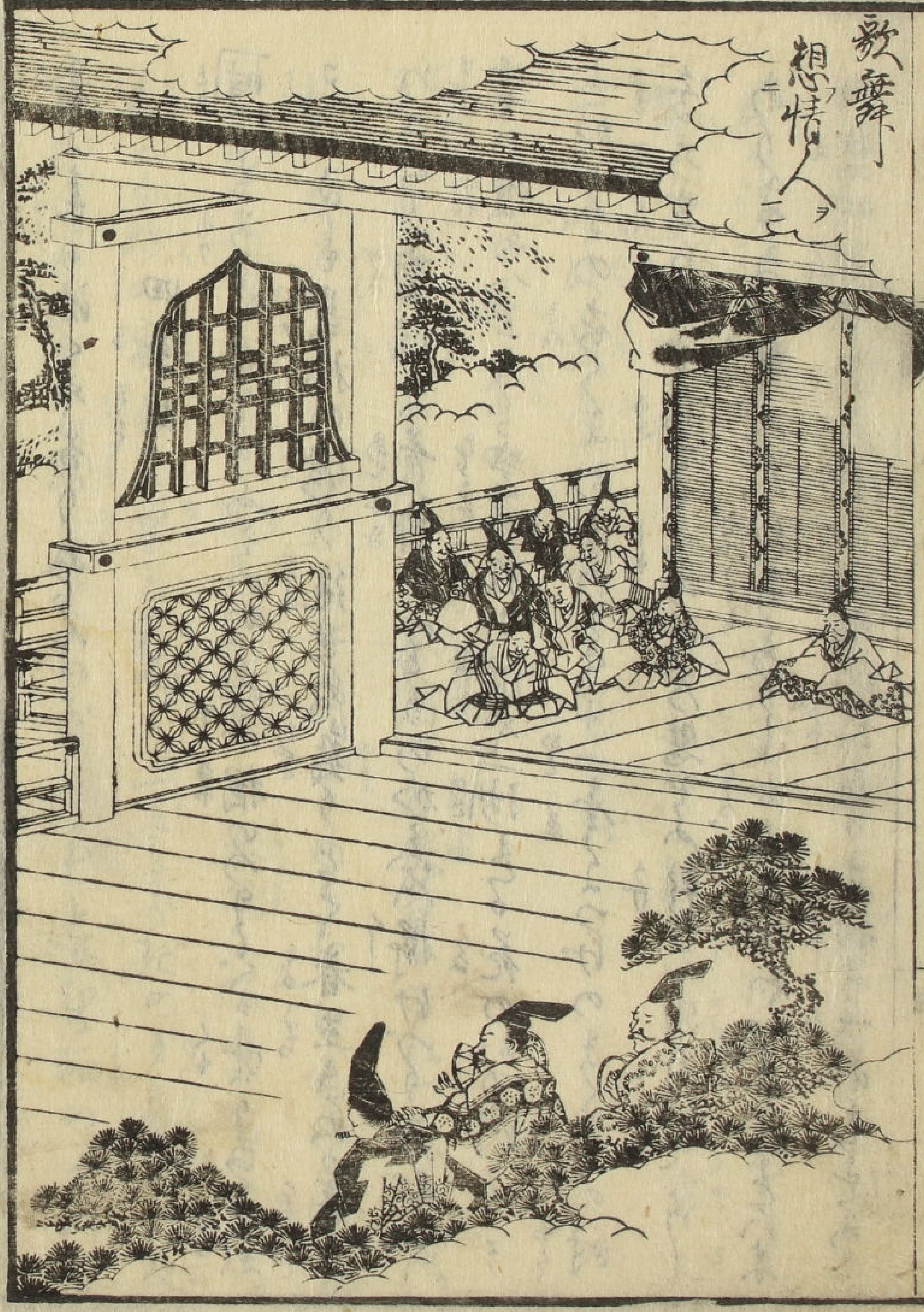
延年の舞

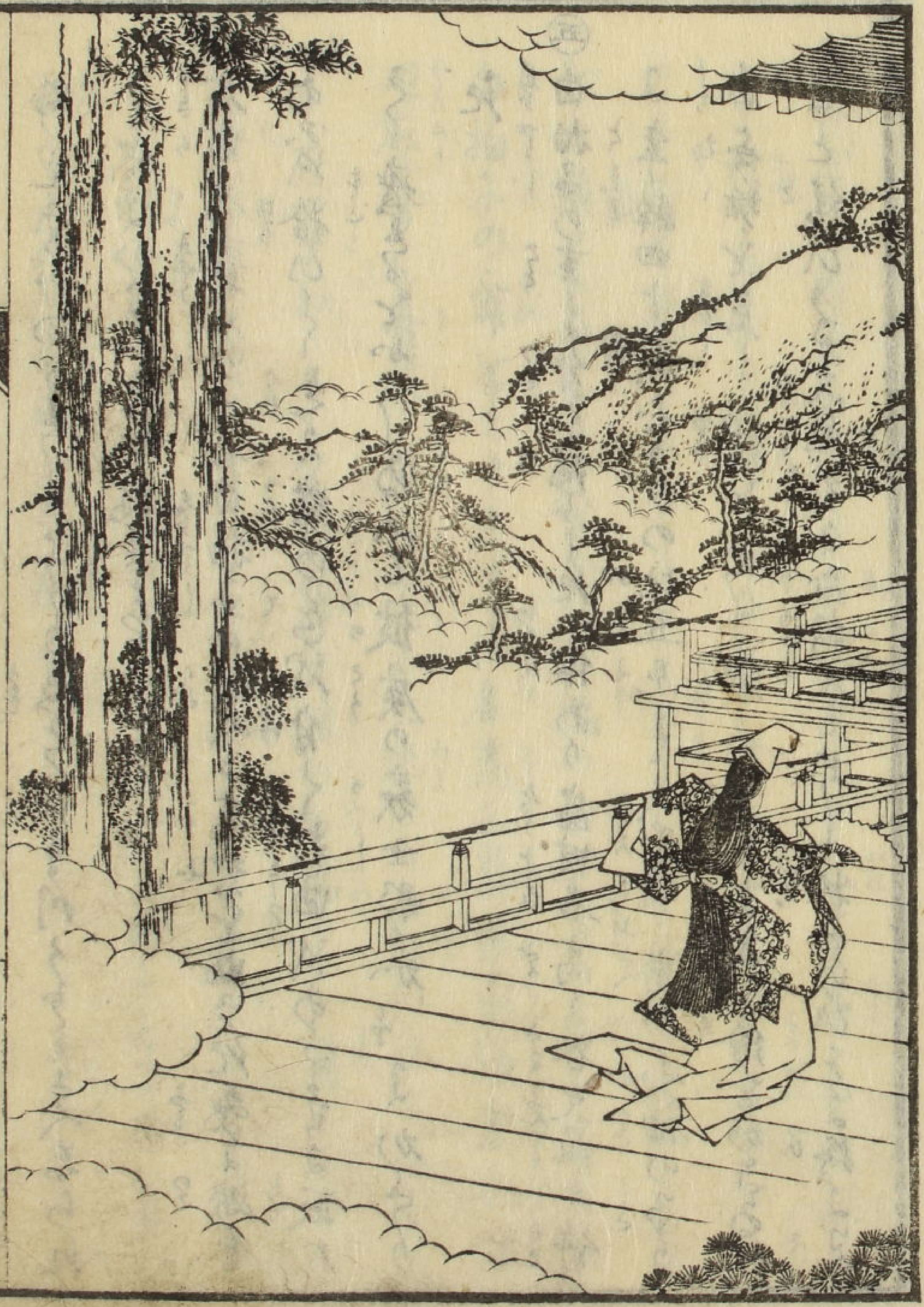
「夫如意寶珠とは所願皆満の名珠なりされバとくに磨き
あげたる初日かげ霞むみどりの山まゆもひらけそめぬる花
あまるや「咲しより盛り日を重く春風に吹きそちる花乃
色は白妙の衣手に雪と見えく「きさらぎの夕暮朧月夜
にあくりのも名残多かるちぎりまぞとどむる袖のうへ川里

香に表も添くやありぬらん

四季曲

「時しもあらく君よりなかのかゞみ山猶のなまぐさ曇りなき影
うつるも長橋の渡り絶せぬ契りとく春立きぬる衣手
はさらふ重ねに青柳のみどりのかつ残揃けぐりなびく
姿は雀やへとうらら紫の如お波や「鳴ける花のおの川から
まかとあるの衣くにおどろかさるく一声まつげのまくらの時
鳴る大空の月も秋なり下の葉乃思ひの影にうつりてよし
ありあまる舞人乃拙折なりしむえりきや「音ばかりも木
の紫時雨とふりくらしさそひ息かる木枯に吹かれそむる


歎舞
想情人



ぬへきけのうたしくとも数そへ給はんさへしられ
ぬ猶よかよひとや猶よしらん
右本乃章ハいつれ人白拍子の唄ふる言葉を始る紀氷にて染を
あつめ拾ひし是に舞の手なと付て数曲なとあらはすに取たる
るへ麿まるをおこしたるを彼廣の家士那かうにかくり
記

(五)白拍子の事に付て珍らしき一話あり当時名高き谷文晁が許
に年齢四十歳ばかりの比丘尼来たり黒羽二重の小袖のうへに
白無垢を召し僕を具し連れて来り文晁に絵をかゝせるに
ありと侍ひけるに文晁外に出行んとせし折といひて強にみえ

しらざりければその人とも名のらで中へ入来る事なきは倅文
一ツに拙きれたりとて辞しけるに尼中けれハ先生乃高名なるを承
りてこそ態く来りしなり何とぞかく情あるへおもはれる
ぞと頻に望みけるまゝ文二郎ハ此の画と申せしかハ是ハ
白拍子の舞をまふとなん名高き静御前鎌倉八幡
廻廊にて舞へる處をとて尼の左指のやうにかゝれ
ころの事むかしの此舞と袴の形好ましく舞しその
得ば其まゝへ舞へる姿を描き給ひてとやの使人数
こそ狂女ならめとて家内の者迄けうがる程思ひしひ
合くりの透間より是をもとうかゞひたるに尼ハ自若

としていさゝかたりけるはひとゝきすゞみにきたるものゝいふ狂女
なるよしなれども絶てねがく乱心の外にもれ聞ゆる狂気のものなる
文鬼ナりしハそこの舞を好まれしかし聞えぬれど其舞し給ひ
しことを知らねハ筆にものするよしなし一曲舞給ふらんやと
笑ながらいはれバ尼云おのれらが舞ゆるしなされど年久
く舞ざりしハいかゞ見給ふ狂のさはなるまじとまで舞ま
給へ望みけれどされど坊主ハさまの衣きもとりいだされ
べ手拭よく包みはさしたるあふぎを一本かし給ひてとて
ら紙にしたゝめおきてこひし余の間の正面に居直りて扇
をバ右の手にもちてきたるはあふぎを出しけるがひら

きてもせぬ衣紋かいつくろひ身のかゝゐなどきつとして
ゐたりしハ袖をひらく袖を口にあてしばらくうちゐたりし
が頓て一曲の唄を発しけるが其妙音中々にもおよぶまじ
きけるぞ人々ちぢみて狂女なりとあなどりけるも耳をそ
ばだて目もはなさでまもり居たる処狂女ふと扇を取てき
りりと立颯と扇を開きたるが扇八十分にひらけたるに颯と
音立る扇のおとよのつねの人いふにも開きたりともかく
るを指まへあらざる趣意なりもおもひ出そのゝとえに感ぬ
せぶんはるし扨立ならべて唄ふながらに舞かゝるでしさも扇の
手といひ声といひ節といひ舞といひいづれもきはめて耳目を驚

かゝるにましてうるはしく舞姫りけるがかの天津かぜ雲のかよひ路吹とぢよと讀るごとく今ひとさしと望ぬ人多かりける文晁眞に感心して頓て筆をとりて画きあたへしかば謝義として若干の物をおくり住居名などは堅くかくして厚く礼と述てかへりしとぞ思ふに此は四国九州には白拍子ののこれるありと聞けば彼地を領しける諸侯の妾など乃年老たる者にやさらば西国あたりの人なるかいづれにもあれまがふ拍子の舞の指子めづらしく見たりとて人々悦びしとぞ此ほか大塔氏の子に傳へしなどもおもむきなり

源三位頼政の旧跡は大炊の御門（今の竹屋町）京極の向ふにあり家

集に二月のはつかちは花まだ咲ぬ門にあるより造りたる桜をくさめのえだにかざしてはかなげに造れる紙独りえんも口としさにむかひある所桜の梢の見ゆるまゝに咲ぬ門にあるドのゝへこの造り花と思ひてよく

頼政

君が住宿の梢のさかぬまにめづらしくもと花ぞさきまける

理齋考ふるに此歌ところの頃まで造る花ありしを知りて持べること知りぬ六百年余の昔なり

相書に一かくの如き眉と判官眉と号けて短氣の相とは

傳ふ曰周防國の住人岩國三郎兼末といへる者なり此等ハ家來
去年攝政殿にゆひしとき義經參候ありしをのぞきしに其
配膳の役に出しかバよく見知りぬ二十あまりにして色白く
面長うして鬚なく一向の小冠者にて京童が義經ハ空
見むしこそのくせありとやいへるが実に折々上のうら見ハ
なる癖ハ世すく齣のさしおとと風聞あるハ大なる人違ひに
て丈ハ近江源氏の山本九郎義經そハ叔こそ山本左兵衛
尉に成し時京童が異名と呼て反歯の兵衛とやくゆひき
判官も源氏山本も源氏彼も九郎是も九郎彼もよし
經是もよし經同姓同名なるをあやまりて取違たりと覺えけれ

判官ハ木曽などゝハかハり最優に京なれて常人ハ然れども
只好色にして美女を愛しゆとこそ承りゆとやなるとこまる
或說に云伊勢の國司北畠殿の藏本をなる人秘して所持し
ける書に曰瀬頼源吾盛安ハ天性双六を好く院中にも召され
しばしば打ける故双六源吾と召れしがある時松殿にて近江乃
山本兵衛尉よし經と双六を打ける折しも丹波國より
来ハせありし搗栗御前にありしを備へし方へ給ひ
なんとおほせける故三番一徳の双六有盛安ハ双六の上
手にてありけれども塞の目出さず義經勝て其搗栗
と山本が方へ参されしにいかなる人のかきたるにや搗栗の

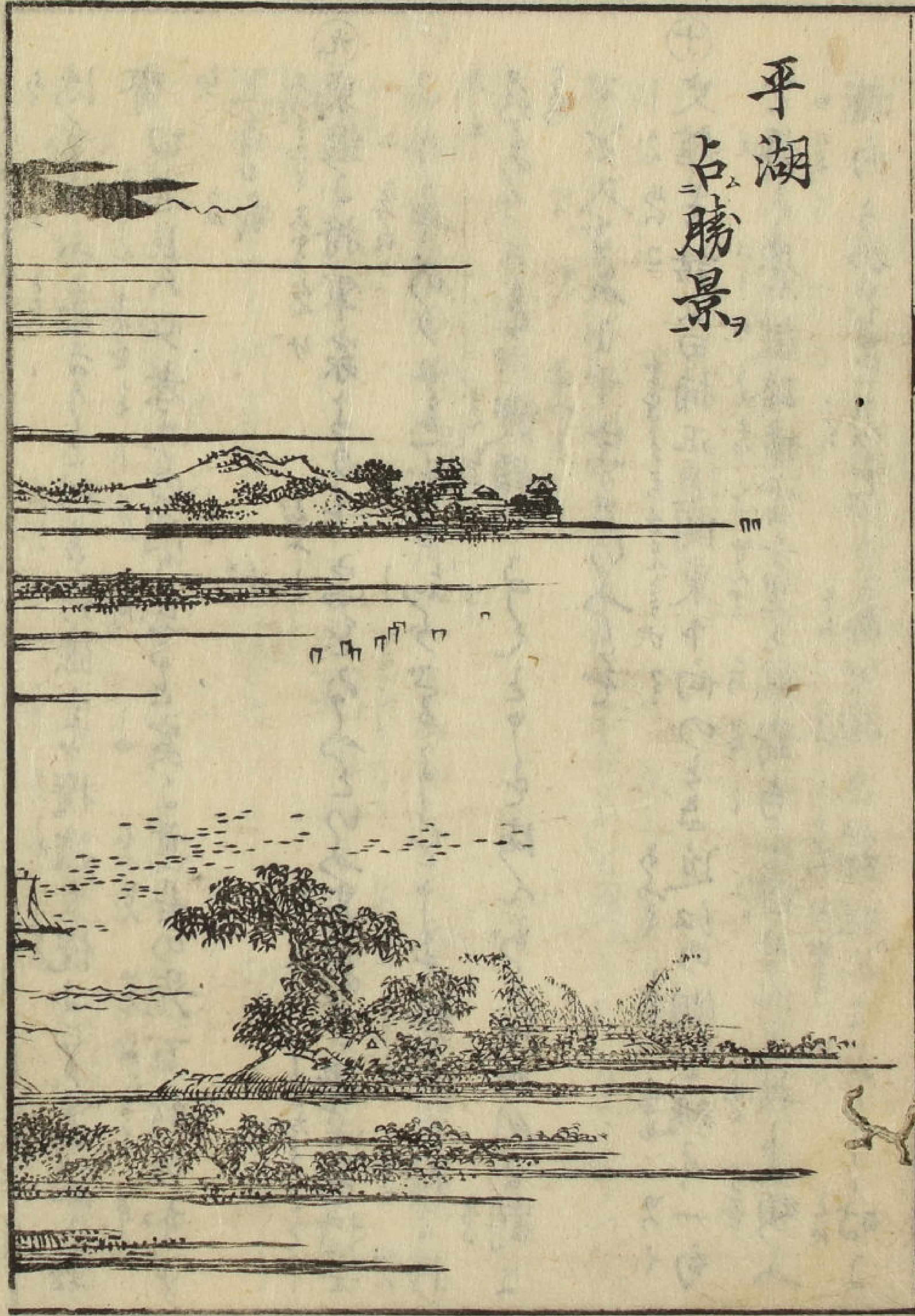
入りし物の下に狂歌書付たり
双六の源吾が塞のうち栗を反歯の兵衛かちぐりにせる
是らの事おかしけれども古を考ふるよすがあれば
しるしおくなり

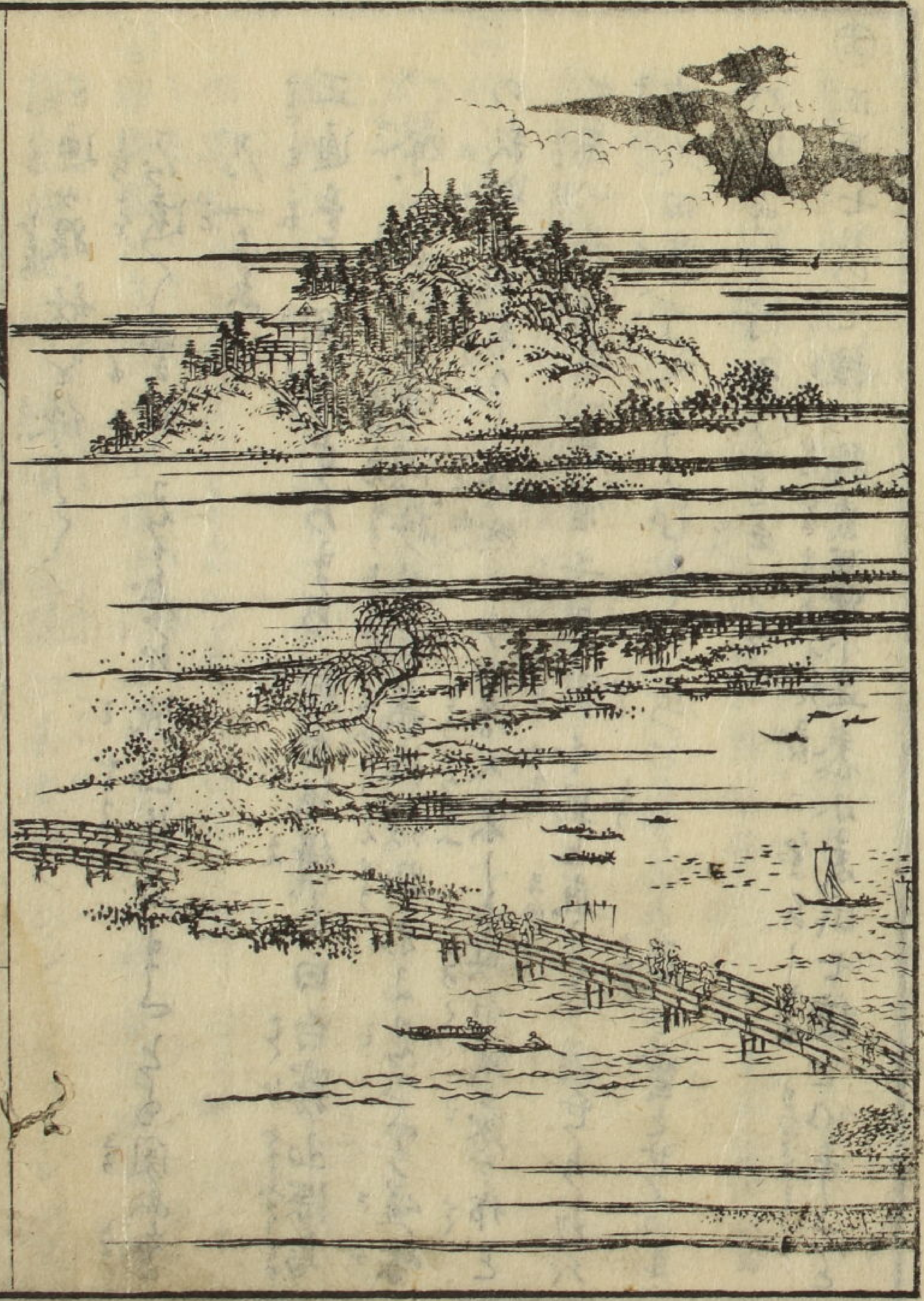
(八)和論語龍田明神の託宣にまことに人なりの紙や紙
敬ひ給ふまじけるべし これ則内外の大神宮なり 伊勢
両宮へまゐりけるよりも猶まさりおもく勤むる處なり
むかしいくり閑寓筆記に智恩院第五上人小榑氏の子
に僧と曰海といふ父母に事へし忠孝人阿弥陀もまゐる

流く喜ぶなりと此言行源空が撰擇の説にことなるやと理
齋曰忠臣の必孝子の門に出るを實に萬吾の先百行の本と
宜なる哉

(九)東鑑に将軍家より十字をたまはりし事あり備道の博士
に御尋ありけれども知らざるよしを鎌倉の僧に侍
る者ありけるは饅頭のことゝいふをまんぢうは何に割に
刀を入るゝに十字といふとぞ

(十)史館茗話に曰補正通関東に向のとき近江の湖を眺く一句
を得る蒼波路遠雲千里と此對句を賦せんと按じ煩ふ
趣向なかなか意を碎き箱根山にいたり時に


平湖占勝景



正通が娘歌を詠じて
なほ遠く雲井にかゝる時鳥深山にまさるとも聞ぬる
乃一こと
正通是を聞てたちまち對句を得て曰白露山深鳥
一聲と右の事十訓抄著聞集江談抄などにのせて嵯峨
の釈迦を取來りし奝然といへる僧入宋して此句を作と
て鳥一声と虫一聲雲千里霞千里と直して見せられれバ
宋人曰甚可之としむかしハ虫を鳥とし霞を雲とせられしを
バいかにも可ならんと云しとぞ

⊕十一 正月七日の七種ハ稲麦豆粟小豆黍小麦此七種を以奉ると

なり文がまに七種と書てなゝくさと訓ずる之宇多天皇の御
時より芹薺鼠麴艸 一名 毋子草 繁縷 佛の座 一名 田平子 菘 蘿蔔
大根 右七草を用ひらるゝ也古ハ上の子の日に用ひし事七
川の字に依りて七日を用ることなりしとぞ

⊕十二 竹に赤くぬりたる紙付る法竹の上に文字を書とも何之ともかさて
其上に糊をしてまた其上にぬり紙付けさて日にかわかし其
後わらの根を二つと巻き糸にてからげまた其上に紙付
の皮にてまきたれバしまりて入まじくむすぶ赤くなりて一妙之

⊕十三 朝鮮國地名 慶尚 全羅 忠清 東萊 晋州 京畿 黄海道 梁山州
溪 金海府 蔚山 鴨緑江 昆陽 江原道 かくのごとくならむるく

清正の擒にしたる両王子の名ハ臨海君順和君といへる
なり

⑭朱晦庵一とせ足の病ありて歩行ならざりしに程ある人
の鍼をうけその疾愈たりし程に大に悦び戯れに詩を賦
しておくられたり其詩に云　十載扶行持短筇一鍼相値
有奇功。出門放杖人争看。不是前来勃窣翁かくありし處に
まもなくふたゝび疾起りたりしかバ人をして其詩を取返さん
事をはかりてかされけるハ其謝賤せし處を惜むに非ずこの詩
をもつて後他人を誤らん事をおそれてのことにて後悔せられし
とぞ

⑮羅城門の舊跡ハ今の千本通りにあり梅城録に曰都良香
羅城門を過る時氣霽風梳新柳髪と詠じけれバ楼上に聲
ありて氷消浪洗旧苔鬚と付けり是を菅丞相の御前にて
詠じけれバ自歎しけるハ下の句ハ鬼詞なりと仰られけり
朗詠十訓抄社考等にもあり

⑯慈照寺　一名銀閣寺庭ハ茶座相阿弥東山殿義政公の
仰によりて是を造る末代庭造りの規範也
　　　　　慈照院義政公
家庵八月待山乃麓なくかゝぶく庭のうげそうしぞ
おゝりの・

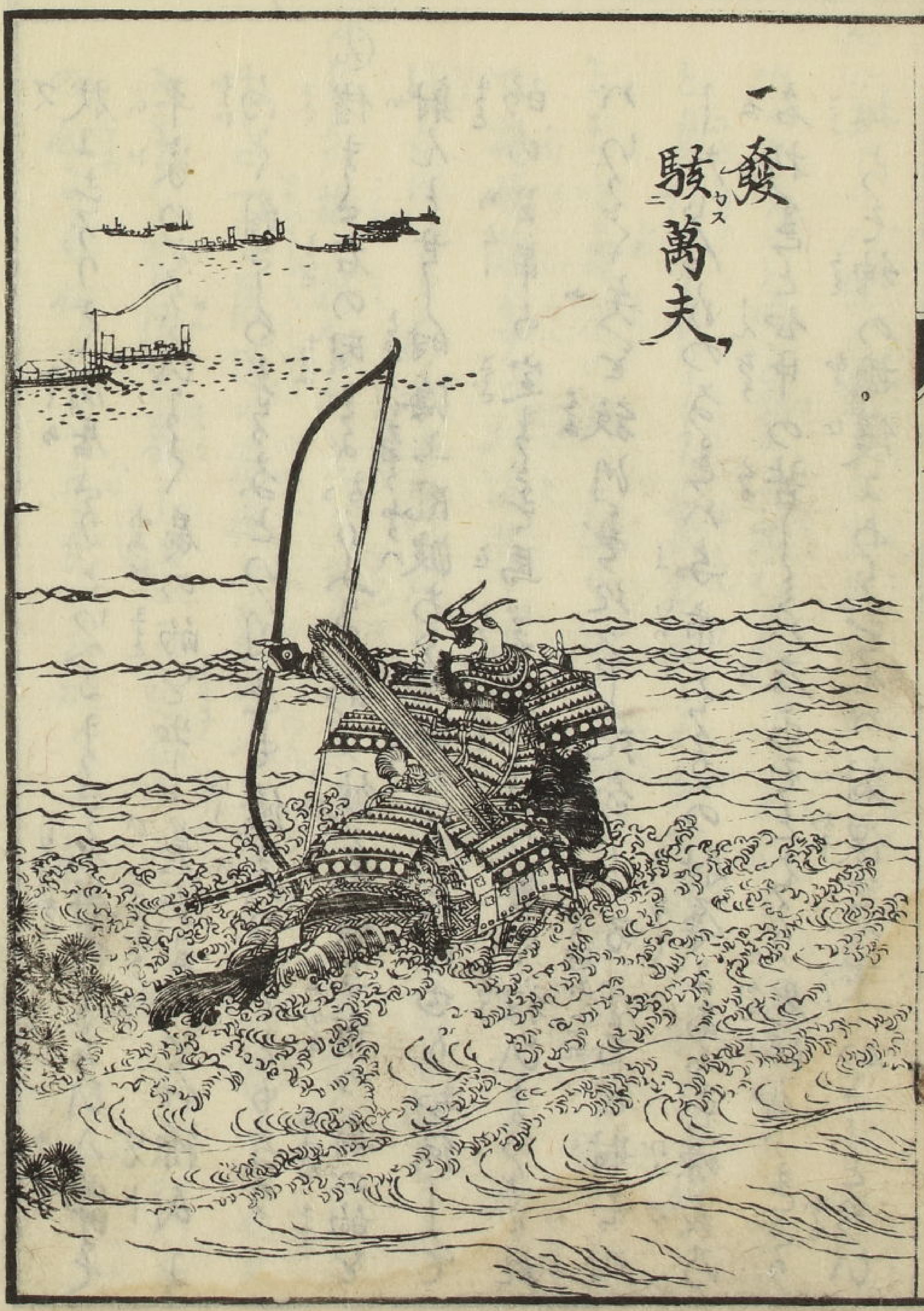
（十七）凡飲食男女ハ人の大欲存すと取わけて色情なども殊に易く迷ひ易きなりし雲に乗り風に馭る仙人も忽ち通力を失ひたり堅固の老僧もよく迷ひ英才の人ハ猶更深く好て迷ふて名将の聞へあるも是又迷ハざるハ楠正成ぐらゐなるべし万のことなりがたく嬉しと思ふものも程なくハ薄く果ハ忘るゝものなり色情ハなりくハ年老て翌日をも知れざる命なれども若者らしき時放蕩なる色情のみありしを思ひ出せば其時の事などを孫に浮ね是忘れぬ処之かくるものなれバ戒るも色にありとく若年のとしくよく家をおさめ身を亡すとあるなるおそるべし慎むべ

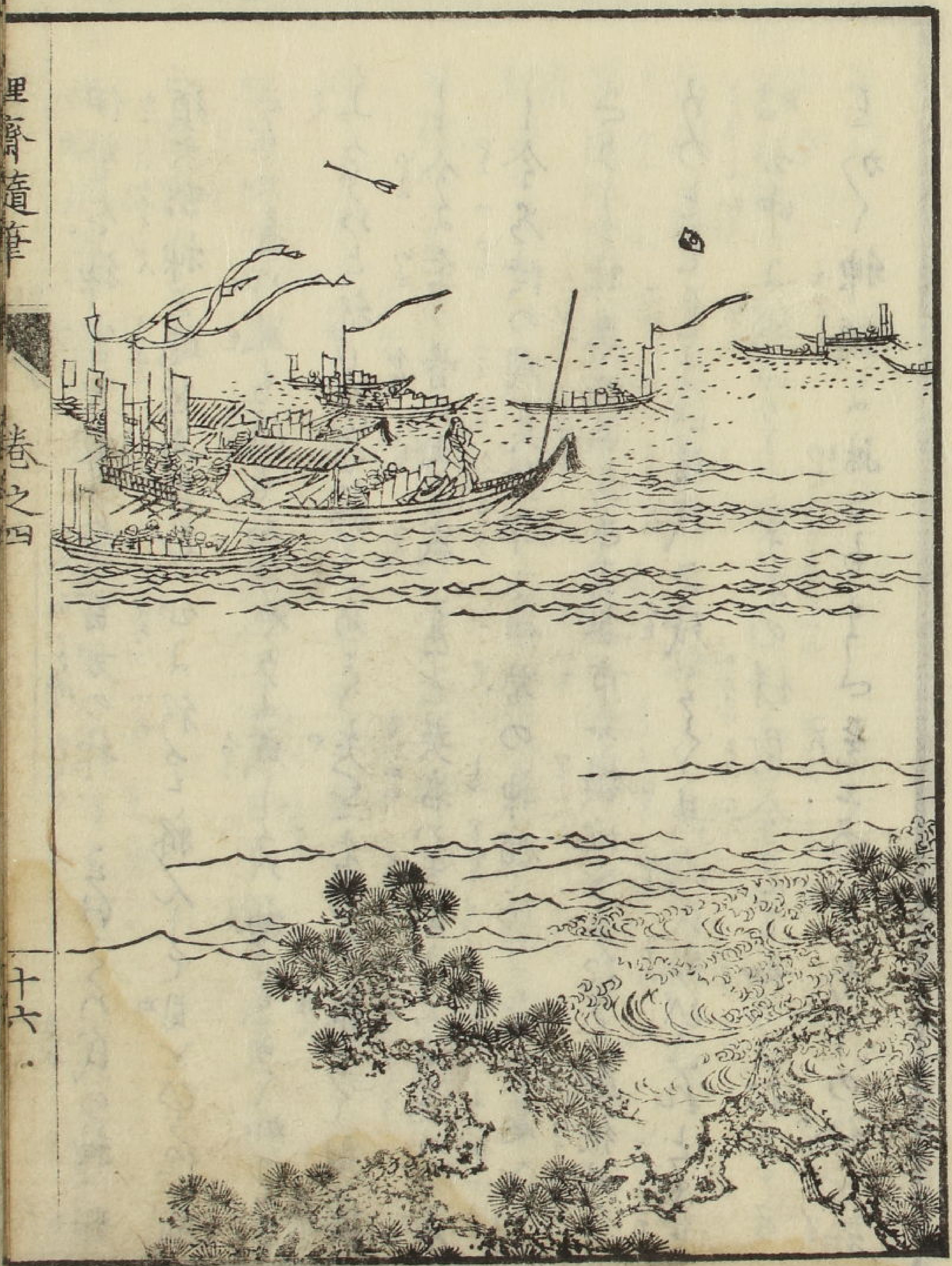
し衛の霊公の夫人と同車にて孔子を後の車に乗せしめられしが夫子歎じて徳を好む事色を好む如きものを見ずとのたまひしなりいかにも万代学び君に仕へ親につかふる事をその色情の如くならんにハ忠臣孝子の誉れを得べしこの比大東世語を読たるに藤の実資若き時より賢者と称せられたり然れども好色の癖あり或日美き女門前を通りしが実資を見て袖を抱き留り侍の人譏りて曰賢者もまたかゝる事を楽しめるとありけれバ実資答て曰色ハ色として賢にハ易へじといひしとかやとそ

（十八）いにしへ八幡太郎義家奥州衣川責のとき衣のたてハ綻びにけりといふ上の句に年をへし糸のみだれのくるしさにと貞任が申せしより義家感じて矢を放さで引返されしともまた壽永のたゝかひ生田の森にて範頼の下知として梶原景季に引返せとありしに武士の取傳ふる梓弓引てハかへらぬならひと答へて箙の矢を射尽しけるしかば梅が枝を折て其箙にさしてたゝかひありしとまた一谷落城の前夜平家の人々皇居の陣営にて夜更るまで管絃を奏しけるに熊谷平山等の何がしもこれを聞て心にも何となく平氏の人ハかくも優なるやさしき矢面とぞ

杖にすがりて閑居なりといへるもまた元暦のたゝかひ八嶋にて平家のかたより小ぶねに扇の的を出し美女玉虫を以て源氏に向て招きけるなどいかにも優美の事どもなり

（十九）偖また右の圖にも見ゆるなり彼那須与市の扇の的を射んとせし時海上風波あらく舟ハゆり上げゆり下して的の目串も定まらず馬足ハ波にあがきて狂ひまはりければいかゞ矢を放ちかねけむもし万一是を射損ぜバしたらんものならば与市ひとりの恥辱にあらず源家の名折なりと心中の苦しさハ左もこそとおもひやらるゝ故にこそ神の擁護にあらずんバ射課せん事かたしと思ひ


一發駭萬夫



伊勢大神宮をはじめ八百万の神々ましますは氏の神那須大明神と眼をふさぎ心に祈念して目をひらき見たりける風も浪もおだやかに成しかば神の加護なると悦びひとかくやう矢をはなち難なく射落しけるに骨は土と成りても英名は天地と共に高き扇し今常陸の國真壁郡に伊勢の神領あり是は扇を射たりし御恩の為なりとて与市が領地をさしあげ献納せしものとぞ是また後代に残りて其人はほろびぬれども其時心中に願ありし事その御影今見る如くにあらはるとかく神領に残るもまた是その心ざしの深きを知

なすべし

○陣太鼓のはじまりは源義経の木曽義仲を征せんとせし宇治川に臨みし折軍中の騒しく下知を傳へかねしより平等院の鐘楼にありし太鼓を取寄て打せければ人々聞馴ざる音なれば何事やらんとて静まりし時に下知を傳へしより始るといへり非也神功皇后三韓を討ためひしときに三軍に令をなす回金鼓節ありて旌旗違ひ乱れるは士卒とがむべしといへる事日本紀に見えたれば是ぞ濫觴ともいふべしとぞ

○史記韓非が傳に衛の彌子瑕は美男也霊帝の寵愛他のに

越たりしに北堂に謁りて君の車に乗らし已まで宿へ
入りけるを人々是を佑りて君に告ぐこれは君の車
に乗りまゐらせ敬を失へる処にて罪軽からずと申せば霊
公曰楽に母あり病重し故に孝の為に敬を忘れし事
なれば罪も却て賞する処ありとて卿相と世に称す或
時見するより桃の実ありて君に奉る母に先に与へんとて已れ
まづ河是を食ひて其余れるを君にささげるこれなも人
罪すべしと申せば霊公曰楽毒味をなして我に献ぜ
たるなればまさに君の為に忠ありといふべしとて科とせず
しく賞したりしが其後寵衰へるに至りし時にの

二事ともの川で大なる罪ありとして罰せられといへる趣
きこえたり世にかかるためし多し心得べき事なるべ
し

(七十二)ある人加賀の千代女が句なりとて海の中にも碁をうちなり
といへるに付たりと

なかりまけて馬に目をかけ川鱗の事

同じくかのあさまもあればなるべきなりといへるに
ましきらくそのたきなるに酒のよそよそく
まさき番阿弥といへる者の口号として
小きかの「けし」粒の中より出て堂建て一ときにかるかるて手

蠟燭せん

「髪をおくと手筋にかく面とり恵くにまむ君

そよぎし紀

大きなの「天の面眼の日月風の息海山ともにこもりあり け

里

「あしき九めの虚空みぐ州と呑あれば須弥も天地まさ

ちかごろりを

長きの「奥州の忍ぶの里に寄添して足代なぞへと延しに州

るゝ事

高きの「大海を獲てあげ落るとて蓋何弥がありまよ雲に

ほうえん

まる何人の狂言あるかりて浄瑠璃ときゝて不しらなきそ

えゝく侍る

まごまひあん浄瑠璃名あんと赤に歌して黄なる

声出す

(廿三)ある人やりうん胎女の男子か女子かを知る俗傳に婦人の年と

夫の年との数を合せて三ツに割りて不足あるは極めて男

子之割切るゝは女子なり産月とりて越えたるは一ツを一数

の中に加へて三ツに除する之式事十に八九は違ひなしと

(廿四)旅行する足豆助ぐる薬　一石灰　一半夏　細末

右の薬泊りに若く足乃膝頭より爪先まで薬を少しあ
たゝかなる湯にてとき摺付れば足軽く成事神妙なり
又草鞋喰ひ踏出し足拵には糊にまぜ膏薬の如く紙
にのべ付てよく治す妙なり是を挟脚散といふ

（廿五）年老て眼鏡杖を用る事六日の菖蒲十日の菊といへる如
く從父の出し後悉る気細工紙まるめの輪ぐりの目
がねを用て眼精外に散らず大に養になるなり予長崎
にて唐人を見るに年若きも平日眼を用ることなき時
なれも多く目鏡をかけて歩行などもする唐人何れも家いへ
ばかりに眼鏡を用る事と為ねばなりらん年衰て眼力落

くなるに至りて用ゆるとも眼力うすく成たるは直る事なし
し若き時より用ゆれば眼鏡に助られ老年に及ぶといへど
も眼精衰ることなし故に用ると答たり是に依て按ずるに
老人になるに実なきのみこれさらば杖の道理もひとしかるべし
老年になりて腰屈みては杖なくては助らぬものゆゑ屈みたる腰
は伸ることなし若き時より用ゆれば年老ても腰の屈むことなければ
極て長命なるべし盲人をみるに幼少より杖を用ゆる故年老
たる盲人腰のかゞみたるを見たる事なし左すれば天下国家
を治るとも平日無事なる時に其心得あるべし乱んとして傾
んとして其時になりて後悔すといへども更に益なきものなり

とおもふのみ
西山宗因江戸旅宿のおりから或人此比はいかいし侍ると
て添削を宗因に頼ける
うへとまて人々のとう山のちなひかゝるは
宗因曰面白けれど連歌めきたり今少し俳諧に做しかる
直しとて
花に水や先いとまなく　東叡山
祇園に引越して桜咲をし待らむとて
霞かけし乞てくるまのくろ
信長と本願寺顕如上人と石山にて数年たゝかひ後和睦に

成し時教如上人此和睦の事に不同意とて本願寺にたて
こもる是武器をとくしを集て須臾とまり今越前船橋
のもとり是をとぞまる信長越前の朝倉義景を征伐せん
たまゝに発向に及ぶまゝし近江の浅井長政朝倉と心
を合て叛むあり信長の帰路を取切て前後より責んと
せしかば信長千種峠をからうじて美濃路へ引上けり
其時其間道の木々に蝶の印をおきて通られしが今に其名を
の木もくに大木と成りの謙の本ありし存在されまく
とかくへ一時の仕業なれども高名の人のせしなれんなり
初のをも後世なる残るなり

理齋隨筆巻之四終